

サンダカンと日本人(二)

木下クニと娘子軍^{じょうしぐん}について

望月雅彦*

はじめに

本稿は『JAMS News』No.25 に掲載された「サンダカンと日本人 門教丸と安谷喜代次をめぐって」(以下、前号と略す)の続編である。前号ではサンダカンで正業に就いていた門教丸と安谷喜代次について述べたが、ここでは賤業婦、醜業婦または娘子軍などと呼ばれた海外に進出した日本人娼婦について述べて置きたい。サンダカンと日本人の関係史を述べる上で、木下クニ(熊本県天草郡二江村出身)と娘子軍のことを無視する訳にはいかないからである。在バタビア領事染谷成章の「英領北ボルネオ州移民状況」¹では次のようである。

「明治 18 年長崎県人木下クニナルモノ賤業ニ従事スル目的ヲ以テ同地ニ渡来シ爾来本邦人ノ来着数次第ニ増加シタルモ其多数ハ一時限リノ住民ニシテ土着者極テ少シ」

木下クニ以前にも船員としてサンダカンに来着した吉田伊之助の例も見られるが、この記述から同地に根付いた日本人としては木下クニが第 1 号ではないかと思われる。1885(明治 18)年と言えば日本国内では太政官制が廃止され内閣制度が確立された年である。以来、サンダカン周辺の日本人といえ木下クニに代表される娘子軍

が主流であった。1894(明治 27)年 4 月に視察でサンダカンを訪れた中川恒次郎(香港領事館・一等領事)^{なかがわつねじろう}は、その視察報告書²の中で「北部ボルネオ(英領北ボルネオのこと)各津港ニアリシ本邦人ハ醜業婦ノミニシテ現ニサンダカン港ニモ六七十名ヲ下ラスト云フ、而シテ正業ヲ営ムモノ曾テナシ」と記述している。

「娘子軍」と「からゆきさん」

「娘子軍」とは、読んで字の如く女子の軍隊のことである。会津戦争で官軍に薙刀を振るって立ち向かった会津藩の女性たちも娘子軍と呼ばれたようで、この言葉が海外に進出した日本人娼婦を指すようになったのは 1900 年代に入ってからのことと思われる。日清、日露の戦役の間隙を縫って盛んに海外に進出して行った日本人娼婦を当時の世相を反映して軍国調にそう表現したのである。また娘子軍の多くが島原、天草の出身だったため、島原女、天草女とも呼ばれた。

「からゆきさん」という言葉もある。「からゆき」とは「唐の国行き」^{から くに ゆ}が転化したもので、この場合の唐は漠然と外国を指しており、天草などでは海外に出稼ぎに行くことを指した。「からゆきどん」と

* ボルネオ史料研究室

² 「英領北部ボルネオ視察報告書」は外務省記録「香港総領事館報告書」(外務省外交史料館蔵・分類番号 6-1-6-7)に所収されている。

¹ 明治 43 年 12 月編纂『移民調査報告第 5』外務省通商局 復刻版 雄松堂出版 1986

という言い方もあったようで、「からゆきさん」とは女子だけを指す言葉ではなかったようである。しかし、今では「からゆきさん」= 海外に進出した日本人娼婦という使われ方をしている。

木下クニのプロフィール

娘子軍の大多数は日本国内から誘拐されるか、騙されて海外に連れ出された女性たちで、正規の渡航手続きを踏んでいない「密航婦」が多かった。娘子軍のほとんどが無名のまま海外で一生を終えた中で、文献に名前を残している者も何人かいる。木下クニもその一人であり、英領北ボルネオにおける娘子軍の元締とされている。

前号で紹介した田澤震五著『南国見たまの記』の中に彼女を紹介した一文「有名なお国婆さん」がある。「其(木下クニ)の容貌は誠に柔和な、少し長みの顔をして居て、特徴としては右の顎に小豆大の痣があり、其の端から三吋許りの長い白髪が三本程生えていることであつた。お国さんは、其の身始終娘子軍の隊長の様な生活をして居たにも似ず、仲々の愛国家で、先年南支南洋一帯に亘って起こつた、日本品ボイコット当時の話を此の婆さんから聞いたが、其の一端にも彼女の面目が躍如として居る。」(41p、ルビ省略)と記してから、その直話を続けて紹介している。

「あの時は、ほんにひどうござムりましてな、ちゃんころの奴が日本品だというと、片端からどしどし焼しまいて仕舞わたしいますばい、妾はあいつらに、そげい、いらん品なら妾に呉れんかい妾に其れを呉れたら、妾はお前等が幸福になるやうに神様に祈つて遣るきゃつらばいと申しますると、彼奴等も、私等は真

から日本品を排斥する心は無いが、仲間から、やかましく言はれるから仕方が無いと言いますばい、其れを見る妾は真に口惜しくて口惜しくて、
もし妾が男であつたら、彼奴等の十人許りも突つきころ殺して遣り度いと思ひましたばい。」(41-42p)

朝倉文夫の『航南瑣話』(東和出版社・1943年)にも、日露戦争の時に日本国家に献金したボルネオ島の娘子軍の話が出てくる。彼女たちは一応に愛国的な側面を持っていたと思われる、この木下クニの発言も決して突飛なものでは無いのである。

衆議院議員上田彌兵衛の見たサンダカン

上田彌兵衛は第41議会の終了後の1919(大正8)年6月から同年9月にかけて、衆議院各会派の代表からなる南洋視察団の一員として南洋各地を巡った。この視察団の構成は、政友会・政尾藤吉(団長)、同・赤間嘉之吉、憲政会・井原百介、国民党・白河次郎、新政会・佃安之丞、正交倶楽部・上田彌兵衛の6名の衆議院議員と衆議院書記官原田幾造ほかであった。

この視察団がサンダカンに到着したのは同年7月19日のことである。上田はサンダカンの印象を著書『南洋』³の中で「(サンダカン)市中は海岸より眺めたるとは少々相違して宏壯華麗なる建築物の樹木丘陵の間に参伍し、三間幅の道路は紆余曲折して断えずサンダカン湾を望見し得る所風光甚だ佳なり。住民二萬の大部分は支那人にして比律賓人、馬來人、ツスン人等順次是に

³ 1921(大正10)年4月1日発行。上田彌兵衛が著者兼発行人で非売品である。

次ぎ、就中支那人街は海岸水上に掛け出され概して不潔醜陋を極むること馬尼拉に於けるが如し」(74p)と記している。また上田は同著の中で「北ボルネオ政庁理事官を訪問せしに、理事官パーロウ氏は不在にして其の妻女なる日本婦人代わりて出迎へたり。聞く処に依ればこの婦人は当地日本人の草分けとして有名なる木下お国女史の下にありしが援引せられて理事官夫人と為れりと。日本婦人にして此地実業家の家庭に入りたるもの此他にも尚有り、在留邦人が是等の人々に依りて間接に便宜を得る事甚だ多しと云ふ。」(73-74p)と記述している。

『南国見たまゝの記』(前出)でも、理事官の氏名は相違するが同様の記述がある。「早速当地の理事官エドワード・バキゾウト氏に敬意を表すべく氏を訪問した。年齢五十余り、当地に在住すること三十一年だと言ふ、(中略)氏の夫人は日本人で、以前は娘子軍の一人であったそうだが、今では立派な理事官夫人である。今日迄在留日本人が此の夫人の為に受けた便宜は仲々多いとのこと」(39p、ルビ省略)

『南洋』の中で「木下お国女史」としているところからも、上田には木下クニと娘子軍を賤業婦、醜業婦と蔑んだ様子はない。かえって他の在留邦人に多大な便宜を与えた点を捉えて、娘子軍の功の面だけ強調しているかとも思える。さらに『南洋』には興味深い記述がある。「日本人遊郭六、七戸あり、戸毎に三、四名の娼婦を置く、隣接して支那人の娼家軒を連ねたり、目下支那人の日貨ボイコットの為に日本人遊郭は著しく寂寥を訴へ居れり、一行は椰子園視察の帰途お国女

史を訪問せしに、三十年来此地にありて侠夫人の名を馳せ在留同胞の為に世話をやく事に於て大なる功績ありてふ此老女は、自ら故郷の大理石を取寄せて一大墓碑を建設し異国の土となるべきを覚悟せしも、其孫娘が目下長崎高等女学校に在りて明年卒業するを機とし帰国すると称し居れり。」(77-78p、傍点筆者)

この衆議院議員の視察団一行はタンジョン・アルの安谷椰子園を視察後、木下クニを表敬訪問(?)していたのである。安谷椰子園、木下クニへの訪問は、大正期のサンダカン視察の定番だったようである。言い換えれば、ほかに見るべきものがなかったとも言える。

英領北ボルネオの日本人

ここでは、英領北ボルネオに展開していた日本人について記述しておきたい。出典は『北ボルネオ』(前出)で、1915(大正4)年頃の状況である。

[ゼッセルトン]

ゼッセルトン(現コタ・キナバル)及其の付近にいる日本人は男15名女24名、日本の醜業屋は6軒。醜業婦は18名、洋妾2名、支那人妾1名、印度人妾1名。

[西海岸鉄道沿線]

ゼッセルトンを基点とした鉄道(現、サバ州立鉄道)沿線及其の付近にいる日本人は男11名女25名、男は菓子屋、売薬業、大工、コック、奉公など、女は醜業婦12名、洋妾4名、支那人妾5名、印度人妾2名。ポフォートとテノムには醜業屋もあったようである。

[クダツ]

クダツ及其の付近にいる日本人は男4名女22名、此処には支那人の醜業屋は居ないが日本の醜業屋は2軒もある。醜業婦は6名、洋妾8名、支那人妾5名、馬來人妾1名。

[サンダカン]

サンダカン及其の付近にいる日本人は男35名女46名、日本の醜業屋は7軒。醜業婦は21名、洋妾6名、支那人妾1名、馬來人妾4名、比律賓人妾1名、印度人妾1名。

[ラハ・ダト]

ラハ・ダトの日本人は男3名女13名計16名、日本の醜業屋は2軒、醜業婦は6名、馬來人妾5名、無職1名。

[タワウ]

タワウの日本人は男9名女11名計20名、日本の醜業屋は2軒、醜業婦は6名、ダヤク人妾1名、支那人妾1名、馬來人妾1名、印度人妾1名。

まとめ

木下クニについては、見てきたように大正時代の視察記や旅行記に多く登場しているが不明の部分も多い。例えば生没年である。山崎朋子『サンダカン八番娼館』には木下クニの養女(おサク)の話が出ている。それによると木下クニは1849(嘉永2)年の生まれで、1889(明治22)年に南洋に行き、1928(昭和3)年2月にサンダカンで没したことになる。また『同書』の中に「戸籍謄本によれば木下クニは安政元年(1854年)7月7日、木下徳次次女として天草郡二江村

式千七百五拾番地に出生」とある。サンダカン日本人墓地の木下クニの墓には「釈最勝信女、俗名木下クニ、熊本県天草郡二江村」とだけあり、没年月日は刻まれていない。

中川恒次郎(前出)の視察報告書にあったように、1894(明治27)年頃にはサンダカンには60-70名の娘子軍がいたようである。1915(大正4)年頃には日本の醜業屋は7軒で醜業婦は21名で、比較すると三分の一位に減少している。しかし、在留日本人総数における醜業婦の占める割合は、依然大きなものであった。『北ボルネオ』(前出)には次ぎの戯れ歌が載っている。「鰐魚集ふボルネオ島に来て見れば港々に大和撫子」(45p)。ワニが集まるというボルネオ島に来て見たら(英領北ボルネオの)港々に大和撫子(娘子軍)が集まっていたという意味である。この戯れ歌が端的に表しているように、大正期に入っても英領北ボルネオの日本人社会における娘子軍の優位は揺るぎないものであったのである。(了)

[追記]

最近、筆者は外務省外交史料館で明治期の旅券下付表を最初から調査している。私の見た限り木下クニ(熊本県平民)の初見は1891(明治24)年で、渡航目的は要所で長崎県庁から香港行き旅券が下付され、半年後位に返納されている。翌年にも同様に香港行き旅券が下付され、後に返納されている。この人間がサンダカンの木下クニ本人かどうかは今のところ明確でない。今後も調査を続けて行きたい。